詩集＜色ガラスの街＞

尾形亀之助

青空文庫

此の一巻を父と母とに捧ぐ

序の一　りんてん機とアルコポン

×　●りんてん機は印刷機械です
×　●アルコポンはナルコポン（魔酔薬）の間違ひです

私はこの夏頃から詩集を出版したいと思つてゐました　そして　十月の始めには出来上るやうにと思つてゐたので　逢う人毎に「秋には詩集を出す」と言つてゐました　十月になつてしまつたと思つてゐるうちに十二月が近くなりました　それでも私はまだ　雑誌の形ででもよいと思つてゐるのです

×

そしてそんなことを思つて三年も過ぎてしまつたのです
で　今私はここで小学生の頃　まはれ右を間違へたときのことを再び思ひ出します

一千九百二十五年十一月

序の二　煙草は私の旅びとである

朝早くから雨が降つてゐた
そして　暗い日暮れに風が吹いて流れ　雨にとけこむ日暮れを泥ぶかい沼の底の魚のやうに
私と私の妻がゐる　私は二階の書斎に　妻は台所にゐる

これは人のゐない街だ

一人の人もゐない、犬も通らない丁度ま夜中の街をそのままもつて来たやうな気味のわるい街です
街路樹も緑色ではなく　敷石も古るぼけて霧のやうなものにさへぎられてゐる　どことなく顔のやうな街です　風も雨も陽も　ひよつとすると空もない平らな腐れた花の匂ひのする街です
何時頃から人が居なくなつたのか　何故居なくなつたのか　少しもわからない街です

＊　＊

＊　　＊

それは
「こんにちは」とも言はずに私の前を通つてゆく
私の旅びとである

そして
私の退屈を淋しがらせるのです

八角時計

私は
交番所のきたない八角時計の止つてゐるのを見たことがない

もちろん——
私はことさらに交番をのぞくことを好まない

×

八角時計は　何年か以前の記憶かも知れない
明るい夜

一人　一人がまつたく造花のようで
手は柔らかく　ふくらんでゐて
しなやかに夜気が蒸れる

煙草と
あついお茶と

これは——
カステーラのように
明るい夜だ

散歩

とつぴな
そして空想家な育ちの心は
女に挨拶をしてしまつた

たしかに二人は何処かで愛しあつたことがあつた筈だと言ふのですが
そのつれの男と言ふのが口髭などをはやして
子供だと思つて油断をしてゐたカフエーのボーイにそつくりなのです

音のしない昼の風景

工場の煙突と　それから

もう一本遠くの方に煙突を見つけて
そこまで引いていった線は

唖が　街で
唖の友達に逢ったような

十二月の無題詩

十二月のダンダラ
——DANDARA

それは
少女の黄色い腰をつつむ
一ペンのネルである

×

穴のあいたような
十二月の昼の曇天に
私はうつかり相手に笑ひかける

春
（春になつて私は心よくなまけてゐる）

私は自分を愛してゐる
かぎりなく愛してゐる

このよく晴れた
春――
私は空ほどに大きく眼を開いてみたい

そして

書斎は私の爪ほどの大きさもなく
掌に春をのせて
驢馬に乗つて街へ出かけて行きたい

題のない詩

話はありませんか
——やせた女の……

で
やせた女は慰めもなく
肌も寂しく襟をつくろひます

ありませんか——
ありませんか——

静かに
夕方ににじむやせた女の
――話は

夜の庭へ墜ちた煙草の吸ひがら

夜る
少し風があつたので
私はうつかり二階の窓からすてた煙草の吸ひがらが気がかりになりました

ねづみの糞を庭に埋めたら豆が生え
そして
のびのび　のびあがつて雲の上で花が咲いて実がなつた
そして

実がはじけて地べたにころがり落ちた

――――――

それが
今――
私の捨てた火のついた煙草の吸ひがらだつたのです

昼の部屋

女は　私に白粉の匂ひをかがさうとしてゐるらしい

――女・女

（スプーンがちよつと鉛臭いことがありますが　それとはちがひますか）

午後の陽は　ガラス戸越に部屋に溜つて
そとは明るい昼なのです

夜半　私は眼さめてゐる
さびた庖丁で　犬の吠え声を切りに
月夜の庭に立ちすくむ――

×

これは　きつと病気だ
あの女の顔が青かつた
キツスから　うつつたのだ

×

夜半　私はそのことで眼を醒ましました

煙草

私が煙草をすつてゐると
少女は　けむいと云ひます

昼ちよつと前です
すてきな陽気です

×

マツチの箱はからで
五月頃の空気がいつぱいつまつてゐる

このうすつぺらな
昼やすみちよつと前の体操場はひつそりして　きれいに掃除がしてある

秋

円い山の上に旗が立つてゐる

空はよく晴れわたつて
子供等の歌が聞えてくる

紅葉(もみじ)を折つて帰る人は
乾いた路を歩いてくる

秋は　綺麗にみがいたガラスの中です

病気

ヤサシイ娘ニイダカレテヰル　トコロカラ私ノ病気ガ始マリマシタ

私ハ　バイキンノカタマリニナツテ
娘ノ頬ノトコロニ飛ビツキマシタ

娘ハ私ヲ　ホクロトマチガヘテ
丁度ヨイトコロニイル私ヲ中心ニシテ化粧ヲシマス

寂しすぎる

雨は私に降る――
私の胸の白い手の上に降る

×

私は薔薇を見かけて微笑する暗示をもつてゐない
正しい迷信もない
そして　寝床の中でうまい話ばかり考へてゐる

猫の眼月

嵐がやんで
大きくくぼんだ空に
低く　猫の眼のような月が出てゐる

私の静物をぬすんでいつたのはお前にちがひない——
嵐のあとを
お前がいくら猫の眼に化けても
お前に眼鏡をとられるようなことのないやうにさつきから用心してゐる

隣の死にそうな老人

隣りに死にそうな老人がゐる

どうにも私は
その老人が気になつてたまらない
力のない足音をさせたり
こそこそ戸をあけて這入つていつて
そのまま音が消えてしまつたりする
逢ふまいと思つてゐるのに不思議によく出あふ

そして
うっかりすると私の家に這入つてきそうになる

ある来訪者への接待

どてどてとてたてててたてた
たてとて
てれてれたとことこと
ららんぴぴぴぴ　ぴ
とつてんととのぷ
ん
んんんん　ん

てつれとぽんととぽれ

みみみ

ららら
らからからから
ごんとろとろろ
ぺろぺんとたるるて

一本の桔梗を見る

かはいそうな囚人が逃げた
一直線に逃げた

×

雨の中の細路のかたはら
草むらに一本だけ桔梗が咲いてゐる

昼の雨

土手も　草もびつしよりぬれて
ほそぼそと遠くまで降つてゐる雨

雨によどんだ灰色の空

松林の中では
祭りでもありそうだ

曇天

遠くの停車場では
青いシルクハツトを被つた人達でいつぱいだ

晴れてはゐてもそのために

どこかしらごみごみしく
無口な人達ではあるがさはがしく
うす暗い停車場は
いつそう暗い

美くしい人達は
顔を見合せてゐるらしい

月が落ちてゆく

赤や青やの灯のともつた
低い街の暗らがりのなかに
倒しまになつたまま落ちてしまひそうになつてゐる三日月は
いそいでゆけば拾ひそうだ

三日月の落ちる近くを私の愛人が歩いてゐる

でも　きつと三日月の落ちかかつてゐるのに気がついてゐないから
私が月を見てゐるのを知らずにゐます

彼は待つてゐる

彼は今日私を待つてゐる
今日は来る　と思つてゐるのだが
私は今日彼のところへ行かれない

彼はコツプに砂糖を入れて
それに湯をさしてニユームのしやじでガジヤガジヤとかきまぜながら
細い眼にしはをよせて
コツプの中の薄く濁つた液体を透して空を見るのだ

新しい時計が二時半

彼の時計も二時半
彼と私は
そのうちに逢ふのです

蝮蛄（おけら）が這入つて来た

秋になつた――

蝮蛄がこそこそ這入つて来た
くだのようなからだを引きずつて這入つて来た
遠慮でもしてゐるように
頭のところにばかりついてゐる足を動かして
近路をしに部屋に這入つて来たように
気がねそうに歩いて

春

私は椅子に坐つてゐる
足は重くたれて
淋びしくゐる

私は　こうした私に反抗しない
私はよく晴れた春を窓から見てゐるのです

天国は高い
高い建物の上は夕陽をあびて
そこばかりが天国のつながりのように
金色に光つてゐる

街は夕暮だ

妻よ——
私は満員電車のなかに居る

私　私はそのとき朝の紅茶を飲んでゐた

私の心は山を登る

そして
私の心は少しの重みをもつて私について来る

×

十一月の晴れわたつた朝

私は新らしい洋服にそでをとほしてゐる

×

髪につけた明るいりぼんに
私の心は軽るい

私は待つ時間の中に這入つてゐる

ひつそりした電車の中です
未だ　私だけしか乗つてはゐません

赤い停車場の窓はみなとざされてゐて
丁度――
これから逢ひにゆく友が
部屋のなかに本を読んでゐるのですが

煙草を吸ふことを忘れてゐるので何か退屈そうにしてゐます

春の街の飾窓
顔をかくしてゐるのは誰です

私の知つてゐる人ではないと思ふのですが
その人は私を知つてゐさうです

犬の影が私の心に写つてゐる

明るいけれども　暮れ方のやうなもののただよつてゐる一本のたての路――
柳などが細々とうなだれて　遠くの空は蒼ざめたがらすのやうにさびしく

白い犬が一匹立ちすくんでゐる

おゝ　これは砂糖のかたまりがぬるま湯の中でとけるやうに涙ぐましい

×

私は　雲の多い月夜の空をあはれなさけび声をあげて通る犬の群の影を見たことがある

五月の花婿

青い五月の空に風が吹いてゐる

陽ざしのよい山のみねを
歩いてゐる　ガラスのきやしやな人は
金魚のやうにはなやかで
新らしい時計のように美くしい

ガラスのきやしやな人は
五月の気候の中を歩いてゐる

無題詩

ある詩の話では
毛を一本手のひらに落してみたといふのです
そして
手のひらの感想をたたいてみたら
手のひらは知らないふりをしてゐたと云ふのですと

十二月の路

のつぺりと私をたいらにする影はいつたい何です

蝶のかげでせうか
それとも　少女の微笑なのかしら

晴れた十二月の路に
私のかげは潰されたよりずつと平らです

五月

或る夕暮
なまぬるい風が吹いて来た

そして
部屋の中へまでなまぬるい風が流れこんできた

太陽が——馬鹿のような太陽が

遠くの煙突の所に沈みかけてゐた

無題詩

から壜の中は
曇天のやうな陽気でいつぱいだ
ま昼の原を掘る男のあくびだ

昔——
空びんの中に祭りがあつたのだ

美しい娘の白歯

うつかり

話もしかけられない
気むずかしやの白い美しい歯なみは
まったく憎らしい

今日は針の気げんがわるい
今日は針の気げんがわるい

三度も指をつついてしまったし
なかなか　糸もとほらなかった
プッツ　プッツ　プッツ　プッツ　――
針は布をくぐつては気げんのわるい顔を出しました

「お婆さん　お茶にしませう」と針が
だが
お婆さんは耳が遠いので聞えません

女の顔は大きい

私は馬車の中で
妻を盗まれた男から話をしかけられてゐる

だんだん話を聞いてゐるうちに
妻を盗まれたのはどうも私であるらしい

で——
それはほんのちよつと前のことだとその男が云ふのでした

×

私は　いつのまに馬車を降りたのか
妻の顔を恥かしそうに見てゐました

とぎれた夢の前に立ちどまる

月あかりの静かな夜る——

私は
とぎれた夢の前に立ちどまつてゐる

×

闇は唇のやうにひらけ
白い大きな花が私から少し離れて咲いてゐる
私の立つてゐるところは極く小さい島のもり上つた土の上らしい

×

私は鉛のやうに重もたい

×

死んだやうに静かすぎる

私は

消えてしまいさうな気がする

×

たくさんの——

烏だ

たくさんのねずみだ

一本の煙突だ

×

一人の馬鹿者だ
夢がとぎれてゐる

二人の詩

薄氷のはつてゐるやうな
二人

二人は淋みしい
二人の手は冷めたい

二人は月をみている

顔が
私は机の上で顔に出逢ひます
顔は
いつも眠むさうな喰べすぎを思はせる
太つた顔です

――で

それに就いて　ゆつたり煙草をのむにはよい　そして
ほのぼのと夕陽の多い日などは暮れる

×

夜る
燈を消して床に這入つて眼をつぶると

ちよつとの間その顔が少し大きくなつて私の顔のそばに来てゐます

或る話
（辞書を引く男が疲れてゐる）

「サ」の字が沢山列らんでゐた
サ・サ・サ・サ・サ・・・・・・と

そこへ
黄色の服を着た男が
路を尋ねに来たのです

でも
どの「サ」も知つてゐません
黄色の服はいつまでも立つてゐました

ああ――
どうしたことか
黄色い服には一つもボタンがついてゐないのです

雨降り

地平線をたどつて
一列の楽隊が　ぐずぐず　してゐた

そのために
三日もつづいて雨降りだ

秋の日は静か

私は夕方になると自分の顔を感じる

顔のまん中に鼻を感じる

噴水の前のベンチに腰をかけて
私は自分の運命をいろいろ考へた

夕暮に立つ二人の幼い女の子の話を聞く

夕暮れの街に
幼い女の子が二人話をしてゐます

「私　オチンチン嫌いよ」と醜い方の女の子が云つてゐます
「……」もう一人の女の子が何んと云つたか
私はそこを通り過ぎてしまひました

きつと――

この醜い方の女の子はちよつと前まで遊んでゐた男の子にあまり好かれなかつたのだ
そして
「私オチンチン嫌い好きなことになつてしまつてその返事のしように困つてゐたのにちがひない

寒むい風に吹かれて
明るい糸屋の店先きに立つて話してゐる幼い女の子達よ
返事に困つてゐる女の子に返事を強ひないで呉れ給へ

一日

君は何か用が出来て来なかつたのか

俺は一日中待つてゐた
そして
夕方になつたが

それでも　暗くなつても来るかも知れないと思つて待つてゐた

待つてゐても
とうとう君は来なかつた
君と一緒に話しながら食はふと思つた葡萄や梨は
妻と二人で君のことを話しながら食べてしまつた

白い手

うとうと　と
眠りに落ちそうな
昼――

私のネクタイピンを
そつとぬかうとするのはどなたの手です

どうしたことかすつかり疲れてしまつて
首があがらないほどです

ね
レモンの汁を少し部屋にはじいて下さい

十一月の晴れた十一時頃

じつと
私をみつめた眼を見ました

いつか路を曲がらうとしたとき
突きあたりさうになつた少女の
ちよつとだけではあつたが
私の眼をのぞきこんだ眼です

私は　今日も眼を求めてゐた
十一月の晴れわたつた十一時頃の
室に

風

風は
いつぺんに十人の女に恋することが出来る

男はとても風にはかなはない

夕方――
やはらかいショールに埋づめた彼女の頬を風がなでてゐた
そして　生垣の路を彼女はつつましく歩いていつた

そして　又

路を曲ると風が何か彼女にささやいた
ああ　俺はそこに彼女のにつこり微笑したのを見たのだ

風は
彼女の化粧するまを白粉をこぼしたり
耳に垂れたほつれ毛をくはへたりする

風は
彼女の手袋の織目から美しい手をのぞきこんだりする
そして　風は
私の書斎の窓をたたいて笑つたりするのです

ある男の日記

妻をめとればおとなしくなる——

私は　きげんのよい蝿にとりまかれて
昼飯の最中です

昼　床にゐる

今日は少し熱があります
ちよつと風邪きみなのでせう

明るい二階に
昼すぎまで寝て居りました

少女の頬のぬくみは
この床のぬくみに似てゐるのかしら
私は　やはらかいぬくみの中に体をよこたへて
魚のように夢を見てゐました

「化粧には松の花粉がよい
百合の花のをしべを少し唇にぬってごらんなさい」　と

そして
私はちかく坐る少女を夢みてぼんやりしてゐる
ぬるい昼の部屋は窓から明りをすすつて
私のかるい頭痛は静かに額に手をのせる

無題詩

夜になると訪ねてくるものがある

気づいて見ると
なるほど毎夜訪ねてくる変んなものがある

それは　ごく細い髪の毛か

さもなければ遠くの方で土を堀りかへす指だ

さびしいのだ
さびしいから訪ねて来るのだ

訪ねて来てもそのまま消えてしまつて
いつも私の部屋にゐる私一人だ

四月の原に私は来てゐる

過去は首のない立像だ

或る年
ていねいに
恋は　青草ののびた土手に埋められた

それからは
毎年そこへ崩へ出づる毒草があるのです

青い四月の空の下に
南風がそこの土手を通るときゆらゆらゆれながら
人を喰ふやうな形をして咲いてゐる花がそれなのです

馬

三十になれば――
そんなことを思ひつづけて暮らしてしまつた
一日

ずつと年下の弟にわけもなくうらぎられて
あとは　口ひとつきかずに白靴を赤く染めかへるのに半日もかかつて
何を考へるではなしいつしんに靴をみがいてゐたんだ

そして夜は雨降りだ

日向の男

男のひたいに蝿がとまつてゐます

陽あたりのよい窓にもたれて
男は
今　ちよつと無念無想です

私は　男のそばの湯のみと
男とをくらべて見たいやうな——
うかうかと長閑なものに引入れられやうとするのです

昼の部屋

テーブルの上の皿に
りんごとみかんとばなな——と

昼の
部屋の中は
ガラス窓の中にゼリーのやうにかたまつてゐる

一人——部屋の隅に
人がゐる

月を見て坂を登る

はやり眼のやうな
月が

ぼんやりと街の上に登りかけた

若い娘をそとへ出しては
みにくくなります

今夜は「青い夜」です

ハンカチから卵を出します

私は魔術を見てゐた

魔術師は
赤と青の大きいだんだらの服を着てゐた

そして
魔術師は何かごまかさうとしてゐたが

とうとう
又　ハンカチの中から卵を一つ出してしまつた

商に就いての答

もしも私が商(あきなひ)をするとすれば
午前中は下駄屋をやります
そして
美しい娘に卵形の下駄に赤い緒をたててやります

午後の甘まつたるい退屈な時間を
夕方まで化粧店を開きます
そして
ねんいりに美しい顔に化粧をしてやります
うまいところにほくろを入れて　紅もさします

それでも夕方までにはしあげをして
あとは腕をくんで一時間か二時間を一緒に散歩に出かけます

夜は
花や星で飾つた恋文の夜店を出して
恋をする美しい女に高く売りつけます

昼

昼は雨

ちんたいした部屋
天井が低い

おれは
ねころんでゐて蠅をつかまへた

無題詩

懶い手は
六月の草原だ

もの怯えした——人の形をした草原だ

×

寂びしげに連なつた五本の指——は
魂を売つてゐた

無題詩

昨夜　私はなかなか眠れなかつた

そして
湿つた蚊帳の中に雨の匂ひをかいでゐた
夜はラシヤのやうに厚く
私は自分の寝てゐるのを見てゐた

それからよほど夜るおそくなつてから
夢で　さびしい男に追はれてゐた

黄色の夢の話

私の前に立つてゐる人はいつたい誰でせう

チヨツキに黄色のボタンをつけてゐるからあなたの友人でせうか
それとも

何年か前の私のチヨツキを着てゐる人でせうか
それが
影ばかりになつて佇んでゐるのですが

七月

「蜻蛉のしつぽはきたない」

なんのことか
おれはそんなことを考へてゐた
そして
ときどき思ひ出した
七月

うす曇る日

私は今日は
私のそばを通る人にはそつと気もちだけのおじぎをします
丁度その人が通りすぎるとき
その人の踵のところを見るやうに

静かに
本のページを握つたままかるく眼をつぶつて
首をたれます

うす曇る日は
私は早く窓をしめてしまひます

十一月の私の眼

赤い花を胸につけた

丈の低いがつしりした男が
私の眼をよこぎらうとしてゐます

十一月の白らんだ私の眼を近くまで歩みよつたのです

少女

少女の帯は赤くつて
ずゐぶんながい

くるくると
どんな風にしてしめるのか
少女は美くしい

彼の居ない部屋

部屋には洋服がかかつてゐた

右肩をさげて
ぼたんをはづして
壁によりかかつてゐた

それは
行列の中の一人のやうなさびしさがあつた
そして
壁の中にとけこんでゆきさうな不安が隠れてゐた

私は　いつも
彼のかけてゐる椅子に坐つてお化けにとりまかれた

旅に出たい

夜る

青いりんごが一つ
テーブルの上にのつてゐる

はつきりとしたかげとならんで
利口な唖のやうに黙りこんでゐる

そして
この青いりんごは私の大きい足の前に
二十五位のやせた未婚の女のやうにやさしい

雨

四日も雨だ――

それでも松の葉はとんがり

蟲

何処かで逢つたことのある
トゲのやうにやせた
気むづかしやの異人の婆さんが
真面目くさつて畳の間から這ひ出て来た

「コンニチハ　気むづかしやのお婆さん
あなたの鼻に何時鍵をかけませう」

美くしい街

私は美しい少女と街をゆく

ぴつたりと寄りそつてゐる少女のかすかな息と
私の靴のつまさきと
少しばかり乾いた砂と
すつかり私にたよつてしまつてゐる少女の微笑

私は
街に酔ふ美しい少女の手の温くみを感じて心ひそかに——熱心に
少女に愛を求めてゐる

×

私はいつも街の美しい看板を思ふ
そして　遠く街に憧れて空を見てゐる

無題詩

私の愛してゐる少女は
今日も一人で散歩に出かけます

彼女は賑やかな街を通りぬけて原へ出かけます
そして
彼女はきまつて短かく刈りこんだ土手の草の上に坐つて花を摘んでゐるのです

私は
彼女が土手の草の上に坐つて花を摘んでゐることを想ひます
そして
彼女が水のやうな風に吹かれて立ちあがるのを待つてゐるのです

たひらな壁

たひらな壁のかげに
路があるらしい——

そして
その路は
すましこんだねずみか
さもなければ極く小さい人達が
電車に乗つたり子供をつれたりして通る西洋風の繁華な街だ

たひらな壁のかげは
山の上から見える遠くの方の街だ

或る少女に

あなたは
暗い夜の庭に立ちすくんでゐる
何か愉快ではなささうです

もしも　そんなときに

私があなたを呼びかけて
あなたが私の方へ歩いてくる足どりが
私は好きでたまらないにちがひない

七月の　朝の

あまりよく晴れてゐない
七月の　朝の
ぼんやりとした負け惜みが
ひとしきり私の書斎を通つて行きました

――後
先の尖がつた鉛筆のシンが
私をつかまへて離さなかつた
（電話）
「モシモシ――あなたは尾形亀之助さんですか」

「いいえ　ちがひます」

小石川の風景詩

空

電柱と
尖つた屋根と

灰色の家

路

新らしいむぎわら帽子と
石の上に座る乞食

たそがれどきの
赤い火事

あいさつ

夕方になつてきて
太陽が西の方へ入いらうとするとき
きまつて太陽が笑ひ顔をする

ねんじう　俺達の世の中を見て
「さようなら」のかはりに苦笑する

そこで　俺も酔つぱらひの一人として
「ね　太陽さん俺も君もおんなじぢあないか――あんたもご苦労に」と言つてやらなければなるまいに

風のない日です

女さえ見れば色欲を起す男は
或る日とうとう女に飛びついた
――が
塔のスレートを二三枚わつただけですみました

女が眠ってゐる

明るい電車の中に
青いうらと
赤いうらと
白いすねを少し出して窓にもたれて眠つてゐる　女

乗客はみな退屈してゐます

昼のコツクさん

白いコツクさん
コロツケが　一つ

床に水をまきすぎた
コツクさん
エプロンかけて
街は雨あがり

床屋の鏡のコツクさん
昼ちよつと前だ
コツクさん

夏

空のまん中で太陽が焦げた
八月は空のお祭りだ

何んと澄しこんだ風と窓だ
三色菫だ

無題詩

ある眠つた若い女のよこ顔は

白い色の花の一つが丁度咲き初めた頃
私が　その垣のそばを通りかかつて見あげた空が
夕方家へ帰つて見たときに黄ばんでゐたことです

夕暮れに温くむ心

夕暮れは
窓から部屋に這入つてきます

このごろ私は
少女の黒い瞳をまぶたに感じて
少しばかりの温くみを心に伝へてゐるものです

夕暮れにうずくまつて
そつと手をあげて少女の愛を求めてゐる奇妙な姿が
私の魂を借りにくる

風邪きみです

誰もゐない応接間を
そっとのぞくのです
ちかごろ　唯の一人も訪ねて来るものもない
栄養不良の部屋を
そっと　部屋にけどられないやうにして
壁のすきから息をひそめてのぞくのです

×

風邪(かぜ)がはやります
私も風邪をひいたやうです

白い路

（或る久しく病める女のために私はうつむきに歩いてゐる）

両側を埃だらけの雑草に挟まれて
むくむくと白い頭をさびしさうにあげて
原っぱの中に潜ぐるやうになくなつてゐる路

今　お前のものとして残つてゐるのは
よほど永く病んだ女が
遠くの方で窓から首を出してゐる

不幸な夢

「空が海になる
私達の上の方に空がそのまま海になる
日――」
そんな日が来たら
そんな日が来たら笹の舟を沢山つくつて

仰向けに寝ころんで流してみたい

東雲（しののめ）
（これからしののめの大きい瞳がはじけます）

しののめだ
太陽に燈がついた

遠くの方で
機関車の掃除が始まつてゐる
そして　石炭がしつとり湿つてゐるので何か火夫がぶつぶつ言つてゐるのが聞えるやうな気がする
そして
電柱や煙突はまだよくのびきつてはゐないだろう

ある昼の話

疲れた心は何を聞くのもいやだ　と云ふのです
勿論　どうすればよいのかもわからないのです
で兎に角――
私は三箱も煙草を吸ひました

かすかに水の流れる音のするあたりは
ライン河のほとりなのか――

×

どうしてこんなだらう　と友人に手紙を書いて
私は外出した

夜の花をもつ少女と私

眠い――
夜の花の香りに私はすつかり疲れてしまつた

××
これから夢です

もうとうに舞台も出来てゐる
役者もそろつてゐる
あとはベルさえなれば直ぐにも初まるのです

ベルをならすのは誰れです
××

夜の花をもつ少女の登場で
私は山高をかるくかぶつて相手役です

少女は静かに私に歩み寄ります
そして

そっと私の肩に手をかける少女と共に
私は眠り——かけるのです

そして次第に夜の花の数がましてくる

九月の詩

昼寝

かうばしい本のにほひ

おばけが鏡をのぞいてゐた

黄色の袋の中

闇みを
小いさい黄色の袋の中に畜つた
そして
よく親しんでみると
かすかな温くみをためてひつそりとしてゐます

この不透明なくろい生きものは
小いさい黄色の袋の中に腰をかけて
煙りをいつぱいにして
煙草をのんでゐることがあるのです

雨　雨

DORADORADO——
TI-TATATA-TA
TI-TOTOTO-TO
DORADORADO

TI-TOTOTO-TO
DORADORADO——
雨は
ガラスの花

雨は
いちんち眼鏡をかけて

年のくれの街

街は夕方ちかかつた

風もないのに
寒むさは服の上からしみこんでくる

何とまあ――沢山の奥さん方は
お買物ですか
まるでねずみのやうに集つて

左側を通つて下さい
左側を――
左側を通らない人にはチヨウクでしるしをつけます

情慾

何んでも私がすばらしく大きい立派な橋を渡りかけてゐました　ら――
向ふ側から猫が渡つて来ました
私は　ここで猫に出逢つてはと思ふと

さう思つたことが橋のきげんをそこねて
するすると一本橋のやうに細くなつてしまひました

そして
気がつくと私はその一本橋の上で
びつしよりぬれた猫に何か話しかけられてゐました
そして猫には
すきをみては私の足にまきつこうとするそぶりがあるのです

毎夜月が出た

「月が出て　夜が青く光つてゐる
はつきり生きてゐるとは云へないが　肉色のものが　数へきれないほど奇妙な形をして動いてゐる

何か悩やんでゐるやうに　そしてどこかしらに性のちがひを示して　極く接してゐるものもある
しかしこのときも天性は愉快な夢を見てゐた　そして何かわからぬが苦が笑ひをしてゐた
寝不足をしてゐるのかもしれない
夢の中に　おかしいことがあつてこらへきれずに　笑ひを口もとに浮かべてしまつたのかも知れない

でも　胸は静かに息をしてゐた
広広した中に胸だけが大きく息をしてゐるのが見えた

2-A

月の匂ひの寂びしげな中に　しつとりと春がとけこんで淋びしい者は自分の名を呼ぶ笛のやうな響をかすかに心に聞いた——

淋みしい　淋みしい——

春

何処かに一人ぐらゐは自分を愛してゐる者があるだらう——青年は山に登つて遠くを見つめて

ゐる
空と　地べたに埋もれてゐるのは
と　青年は自分の大きな手をひろげてつくづくと見入る
そして青年の言葉は彼の指さきから離れて　遠く高い煙突などにまぎれて極まりなく飛んで行つてしまふ

まもなく青年は彼の部屋に　寝台の上に弱々しく埋づまつてゐる
青年の夢は昨日からつづいてゐる
とぎれた心と心がむすびつかふとする　まつ白な夢だ

夜半　青年は夢に疲れて寝言を云つた
彼のさし伸べた手の近くにすすけたランプと　山で別れた言葉が幽霊のやうに立つてゐた
すすけたランプの古臭い微笑が　さし伸べた彼の指さきに吸ひ込まれたやうに消えると部屋は再び
うす暗くなつて
いま　彼はひとり部屋の中に眠つてゐる

2-B

或る所に
月が出るやうになると　女が男のもとへ通つた
そして　夜の青じろい月を女は指した
黒い男と女の影のやうなものが、男と女の足もとのところから出て地べたを這つてゐた
紙のやうに薄い　白い女の顔が男の顔へ掩ひかぶさると——
月はそれを青く染め変へた

3-A

ゆらゆらと月が出た

月が空に鏡をはりつめた
高いのと遠いので虫のやうに小いさく人が写つてゐた
家家では窓をしめて燈をともした
娘は　安楽椅子に腰かけて歌をうたつた
この　わるい幻想の季節の娘について　親達は心を痛めてゐたが
娘はその手招きを見てゐた
そして　少しづつかたむいてゆく心に何かしら望みをかけてゐた

娘は白粉をつけていたが青く見えた
娘はうつむいて　死んだ目白のことを思つてゐた
あわれでならなかつた
月にてらされて地べたに浅く埋づまつてゐることを思つた
娘は庭へ出た
そして　娘は月に照らされた
娘は　月夜のかなしい思慕に美しい顔を月にむけて
そこには梅の木や松の木の不思議にのびた平らな黒い影があつた
そして　その上に月が出てゐた

娘はかなしい歌をうたつた
そして瞳はぬれて　静かに歩るいてゐた

娘は鬱蒼と茂つた森林に這入つた
そして　そこで娘は彼女のやさしい心にささやいた
「美しい月夜」
立木は眠つてゐた　彼女は失なつたものをやさしい彼女の心にたづねた

娘は蒼白な月につつまれてにつこりともしない
そして娘はそつと部屋に這入つた
月の光りは部屋の中に明るい海のやうに漂つてゐた
窓近く娘は椅子をひき寄せた
十八になつた　娘はかなしい
月が遠い
娘は顔を掩つた
と——　祭りのやうなうたごゑが次第にたかまつてきて娘の耳にも聞きとれさうであるが　それは静かな雨の夜にポツンと雨の一しづくがとよをうつやうな　わけもなく淋みしい音色を引いてゐた
娘の心の底から湧いてくるやうに　でもあつた
娘は眠つてゐるやうに動かない
娘の影が少しづつずれて、そして彼女から離れてしまつた
そして　月の光りの中に娘の影は笛のやうに細く浮んでゐた

3-B

娘が窓から月を見てゐた
はなやかな月夜の夕暮れである

「ああ　消えてゆきさうな――」と娘は身をかばうやうに窓を閉めた

明るく照らされた窓を　月が見てゐた
そして　娘の見た幻想の中に　自分を見つけた
針金のやうに細く　青く　水のやうに孤独な人格をもつた自分を――
月が娘の窓近く降りて来ると　部屋の中に力なくすすり泣く娘のなげきを聞いた
「恋人よ――
恋人よ――
今宵は月までが泣いてゐる」
娘は泣きぬれて顔をあげた
月は窓を離れた　そしてさりげなく月は笛のやうにせまく細く青い　娘の幻想をよこぎつて通つた
月は天に帰るまで娘の嗚咽を聞いた
月の忍びの足音は消された
あたりはしんとした
空に青い月が出てゐた

十

青い月夜の夕暮がつゞいてゐた
人人は　娘の泣く不思議な感情になやまされた

老人の一人娘も　その隣りの娘も
美しいばかりに　冷めたい顔をして泣きくれてゐた
娘はみな泣いてゐた
泣きごゑがふるへて風に吹かれた
そして空の方へ消えていつた

人人は空を見あげた
娘らの泣くこゑの消える　はるか空のかなたを見た
猫がゐる——人人は空のひととこを指した
黒い猫がゐる—人人が集まつた　そして月を指した

娘らの泣くこゑはさびしく響いた
やさしい娘らの泣くこゑがなまめかしい衣裳につつまれて　夜鳥のやうに吹かれて消えていつた

青空文庫情報

底本：「尾形亀之助詩集」現代詩文庫、思潮社
1975（昭和50）年6月10日初版第1刷
1980（昭和55）年10月1日第3刷
入力：高柳典子
校正：泉井小太郎
2001年10月10日公開
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

詩集＜色ガラスの街＞

尾形亀之助

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/